

取手の戦国時代

永禄十二年の夏

龍禅寺仁王像

龍禅寺三休堂木札

平成23年7月20日(水)から9月22日(木)まで

会期中無休／入館無料 午前10時から午後5時まで(入館は4時30分まで)

展示案内：毎週土曜・日曜午前11時からと午後2時から(30分くらい)

第30回企画展「取手の戦国時代 —永禄十二年の夏—」について

今回の企画展に戦国時代を取り上げようと思いついたのは、NHK大河ドラマなどで戦国時代に関する世間の注目が集まっていると感じたからです。ドラマだけでなく、これまであまり戦国時代の歴史に関心のなかったと思われる人々のなかにも「戦国ブーム」の高まりが感じられました。

そこで今回は、初めてのテーマとして中世という時代の取手市域をとりあげることにしました。

今回の展示構成の特長として、取り上げる時代を、中世から近世に移り変わろうとする戦国時代末にしぼりました。

戦国時代の戦いは、広い範囲の人びとを巻き込んだ戦争ですから、市内の資料だけではなく、取手市高井城跡とその出土品のほか、守谷市守谷城、つくば市小田城、桜川市真壁城、常陸太田市佐竹氏関連資料など、遺構や出土品など発掘資料を展示します。さらに、この時代の舞台となった高井城の周辺には、三仏堂のほか高井薬師堂、高井城跡、高源寺地蔵けやき、相馬胤永の墓、などの文化財があります。また、藤代から、高井城をへて守谷城にいたる街道は、中世の景観を残しています。現在に残る中世の面影をたどってみましょう。

下総相馬氏は、北相馬丘陵一帯に、守谷城を本拠地として、高井城、筒戸城などを支城にもつ桓武平氏の流れをくむ名門で、代々その名の由来となった相馬御厨を領地とし、平将門の子孫であることを誇りとする一族でした。しかし武田信玄、上杉謙信、北条氏康、佐竹義重ら戦国大名が利根川・小貝川を挟んで激突する事態になると、下総相馬氏のような小さな国人領主たちは、その意志に関わらず戦いの渦に翻弄されていくことになりました。この乱世と呼ばれた戦国時代にあって下総相馬領を守るために生き抜いた相馬治胤・胤永という2人の武将の存在が浮かび上がってきました。歴史の流れは、この2人の生涯と並行して進んでゆきます。

取手市埋蔵文化財センター

講演会「東国の戦国時代と古河公方の位置」

講師：内山俊身氏（前茨城県立歴史館首席研究員）

日時：9月3日（土）午後1時30分から午後3時 開場は午後1時

会場：福祉交流センター 定員160名（予約不要）

特別公開国指定重要文化財「龍禅寺三仏堂」

（取手市米ノ井467）7月29・30・31日午前10時から午後4時

特別公開「下高井の中世史跡」高井城・薬師堂・高源寺

案内：薬師堂（取手市下高井1323）8月26・27・28日午前10時から午後4時

歴史講座「取手の中世」

取手市の中世をわかりやすく解説します。講師：埋蔵文化財センター職員

日時：全4回8月20日、9月17日、10月15日、11月19日午後1時30分から午後3時

会場：埋蔵文化財センター 定員40名（要電話予約）

第1回「将門の子孫 相馬氏と相馬御厨 —取手の中世の始まり—」

第2回「古文書にあらわれる取手の地名 —南北朝時代の取手—」

第3回「常総戦績の世界 —大鹿城と小文間城をめぐる攻防—」

第4回「幸手一色氏と小文間城主一色氏」

謝 辞

今回の展示ならびにパンフレットの作成に関しては多くの方々から、たくさんのご協力をいただきました。お名前を記して深謝申し上げます。（敬称は略させていただきました。）

秋田市立佐竹史料館、井坂敦実、宇留野主税、岡田清一、川崎純徳、川嶋建、桜川市教育委員会、佐竹寺、佐藤成男、高源寺、つくば市教育委員会、つくば市出土文化財管理センター、西野保、常陸太田市教育委員会、常陸太田市郷土資料館、常陸太田市諏訪神社、広瀬篤、広瀬季一郎、守谷市教育委員会、諸星政得、龍禅寺

「永禄十二年記録」木札

取手市米ノ井の龍禅寺境内の一角に三仏堂があります。昭和60年1月に解体修理が始まりました。解体中、須弥壇脇の右来迎柱に、打ち付けられた木札が発見されました。尖頭形で長さ20.4cm、幅9.7cmで、

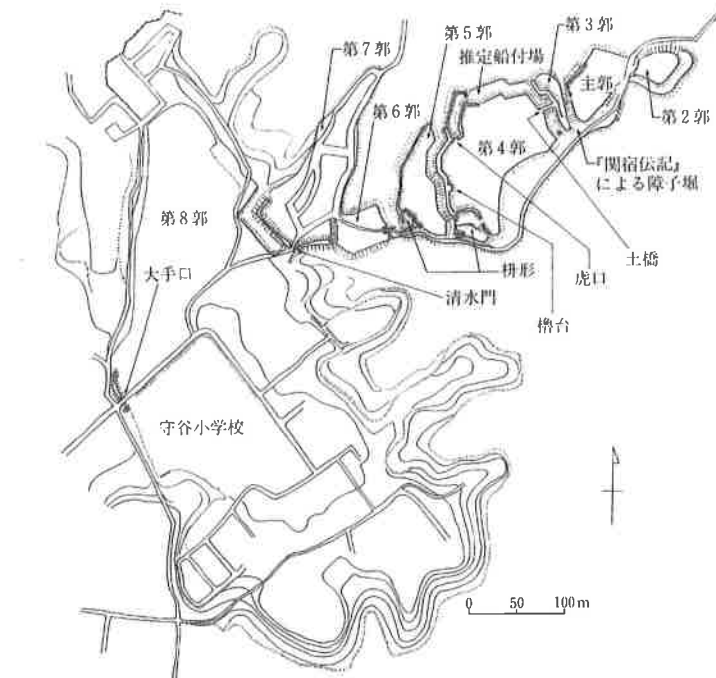
表面は長い年月の風蝕により読むことはできませんでしたが、裏面には「于時 永禄十二年己巳八月廿八日 敬白」と記してありました。

この木札が当時、なにか祈願のために柱に打ち付けられ、410年以上そのまま、そこに残っていたことは疑いありません。祈願の内容はいまでは知る由もありませんが、そのころ、この付近一帯は戦国期のまっただなかにありました。

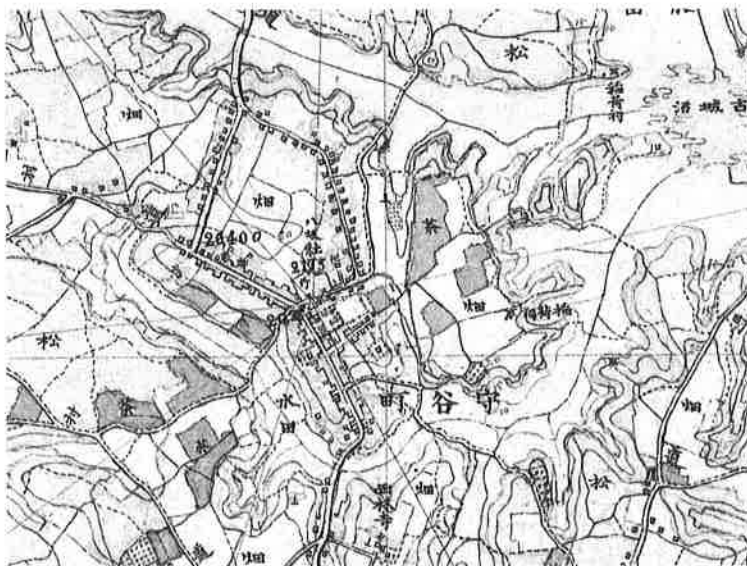
当時、常陸と下総の国境である利根川・小貝川を挟んで、北から常陸守護職佐竹義重、関東管領上杉謙信らが、南からは北条氏康がみずから擁立した古河公方をたてて衝突を繰り返していました。戦国大名同士の争いの中にはさまれ、在地の国衆と呼ばれる領主たちは、どちらに加担すれば生き残ることができるのかを模索していました。下総相馬当主、守谷城主である相馬治胤もその一人でした。治胤は、永禄十二年の3年前、妻の弟である第14代相馬家当主整胤が家臣に殺され、その後を継いだのでした。

相馬家内紛

第十三代相馬家当主、胤晴が(天文14)川越合戦で戦死すると、嫡男整胤がわずか3才で家督を相続します。整胤の母は古河公方足利義氏の側近、梁田高助の娘でした。当然、若い整胤に梁田氏が後見についたもの



守谷城見取り図 (取手市史通史編1)



守谷城の周辺 二万分之一迅速測図 明治14年(部分)

のと思われます。下総相馬家祖先である将門を討った貞盛の後裔である梁田氏の支配につくことを潔しとしない家臣が大勢いたと思われます。梁田氏の介入を快く思わなかった相馬家の家臣たちは、永禄元年ころ、整胤の元服時期を前後して、内紛をおこしました。その收拾を足利義氏が梁田晴助に命じています。

このころは、1552年(天文21)北条氏の擁立する義氏が11歳で第5代古河公方に就任しました。1558年(永禄元)、氏康のもとにいた義氏が元服して、小田原城から帰国する事が決まり、氏康は晴助に古河城と晴助の関宿城の交換を命じ、晴助もこれを受け入れました。一時的に義氏と晴助の関係が良好でした。

事態の收拾にあたった梁田晴助はその後、強権姿勢を貫きました。しばらく後、梁田晴助は「今度相馬の地もし本意につけば、佐賀主水佐抱えの知行分、相違有るべからず候」と相馬領地の横領を企てています。

1560年(永禄3)、梁田晴助は、関東に進出した越後上杉謙信と共に、古河公方足利晴氏の後継に足利藤



下高井小字名 * 城郭にちなんだ地名がみえる

ぐれていたと述べています。

1565年（永禄8）第1次関宿合戦がおこりますが、佐竹氏や上杉氏から援軍を得た梁田氏はなんとか北条方と和睦にこぎつけました。しかし北条氏は、北関東への入口として、築田氏が本拠とする関宿城の奪取を企て、その後も何度も合戦を仕掛けました。関宿は利根川水上交通の要地でもあるため、通行税などの貴重な収入源でもあったのです。

守谷城明け渡し

ちょうどこの苦境の時期に、治胤は相馬家の家督を継いだのです。後ろ盾を失った相馬氏は、1566年（永禄9）足利義氏を通じて北条氏に赦免を願いました。それに対し、北条氏側の条件は、守谷城の明け渡しでした。義氏の古河城帰還にあたって、義氏が一時守谷城を使用し、年内に古河に帰還するので、その後は築田氏の要求どおり、築田氏に与えるという過酷なものでした。



高井城第1郭発掘図

これは、その年に甥の整胤を殺された築田晴助が義氏を利用して謀ったものと思われます。

永禄10年、北条氏政と義氏から軍勢が向い、守谷城は明け渡されました。翌11年、北条氏によって守谷城の普請が始められました。しかし、同年には再び関宿合戦がおこります。このため、築田氏に対して守谷城の受け渡しはおこなわれませんでした。

1569年（永禄12）、戦いに飽きた上杉氏と北条氏が講和して、越相同盟が成立し、晴助の籠もる関宿城を攻撃していた氏照も兵を引き、義氏は守谷城に入ることなく、古河に帰還しました。

いっぽう反北条方の越相同盟への反発を利用して、再び晴助は足利藤氏の弟、藤政を擁立し、北条氏に対抗しようとし、そして、1574年（天正2）再度、関宿合戦がおこったのです。その結果、敗北した築田氏は水海城に追われ、その後は北条方として戦いますが、表立った働きはなくなります。

守谷城を明け渡した治胤は、すでに築田氏とは別行動で北条氏に仕えていたようです。しかし、その後主が誰もいなくなった守谷城に、治胤が帰れたかどうかはわかりません。

氏を擁立し、北条氏に擁立された足利義氏を関宿城から追い、藤氏は古河城にはいりました。

しかし、謙信が帰還すると、北条氏照は反撃し、1562年（永禄5）藤氏は捕えられ殺されてしまいます。

1566年（永禄9）、整胤は家臣に殺害されて治胤が家督を継ぎました。相馬左近太夫、民部太夫系図には補注に「治胤幼年より弓矢を取りて其の誉れ多し、奇学を好む、十六夜の天臣とも云う」とあり、武芸や学問にす

1590年の小田原の役では、弟の高井胤永と共に兵約100名を率いて小田原城へ籠城しますが、敗戦後、北条方として所領を没収されました。

小田原の役のあと

高井城に残った治胤の子、秀胤は徳川家康に内応して下総相馬領のうち5000石を与えられました。文禄の役においては、家康に随従して名護屋城までゆきましたが虚弱な体質だったのか、病死してしまいます。このため、弟の胤信に3,000石が与えられますが、病のために関ヶ原の戦いに出陣できずに病没して改易されました。治胤は、守谷城へは帰れず、各地を流浪して1602年、最後に江戸で死去したと伝えられます。



高井城復元予想図

「相馬家之系図」には「北條滅却後、欲事関白秀吉公雖訴訟不叶、流牢之後、請信濃守胤信扶持、旁遺恨難散、於武州江戸山手思死云々、子孫断絶、」秀吉に対して訴えたのは、下総相馬氏が平将門につながる名門の家系であり、それにふさわしく大名として存続することを願ったものと思われる。秀胤が与えられた5000石は、家康の家臣としては破格の石高ですが、名門である下総相馬領からすれば不足過ぎると思ったのでしょうか。「遺恨散り難く、思い死ぬ」というのは相馬領を守りきれなかったことに対する後悔と、ふるさと下総相馬に対する望郷の念だったと思われる。

治胤の弟、相馬（高井）胤永（1558-1640年）は兄・治胤が下総相馬氏の家督を継いだため、高井城を継いだといわれます。相馬左近太夫、民部太夫系図には補注に「胤永十六歳より弓矢を取りて其の誉れ多し、佐竹表一戦の砌氏直と一里塚において馬上にて互い対顔す、」とあり、武芸にすぐれていたと述べています。

兄に従って北条氏に従属し、佐竹氏らとの戦いに従事、天正12年（1584年）の沼尻合戦においては、北条氏直から感状が与えられています。

年の離れた兄とは仲がよかったらしく、ほとんどの戦いで同行しています。小田原の役でも兄とともに小田原城に籠城して改易されました。しかし、兄のように名門の家系を守るといった強い使命感はなかったように思われます。弟の気楽さで余生を楽しむことができたのではないのでしょうか。

戦国時代の終わり

1583年（天正11）義氏は跡継ぎを残さず42才で没しましたが、すでに上杉謙信も1578年に亡くなっており、関東公方や管領に関心を払うものはいませんでした。

1587年（天正15）秀吉による惣無事令が関東・奥羽地方に向けて発せられ、これによって戦国時代は終わりを告げることとなります。その3年後、1590年（天正18年）に、小田原征伐で北条氏が滅びました。これにより南関東は徳川家康が支配するところとなり、いっぽう常陸では佐竹氏による統一がなりました。しかし1600年（慶長5）、関が原の戦いによって、佐竹氏は秋田に転封となります。

豊臣氏も1614年（慶長19）大阪冬の陣、1615年（元和元）大阪夏の陣で滅び、1616年（元和2）家康も死去しました。

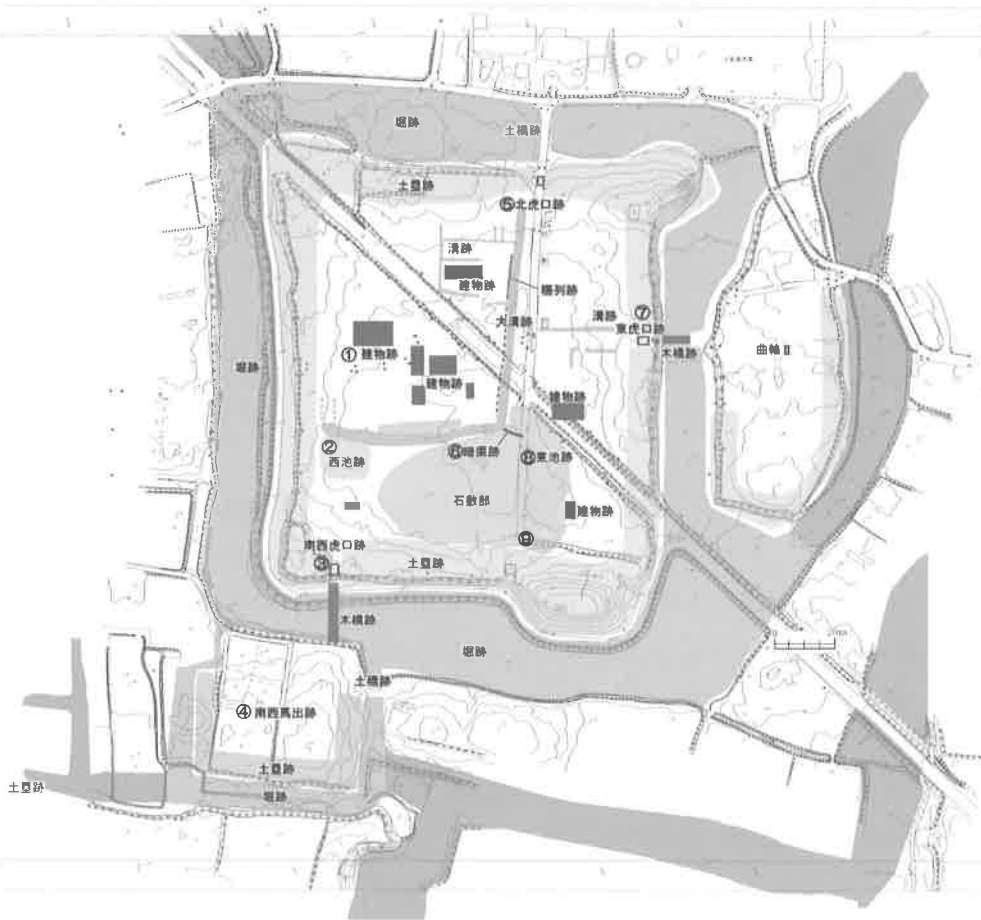
最後の高井城主相馬（高井）胤永は隠棲した高井の地で、戦国時代の終わりのすべてをみながら、1640年（寛永17）に亡くなりました。

小田氏と小田城

小田氏の祖、八田知家は、最初の常陸守護に任じられました。

戦国時代、13代治孝が弟顕家に殺害されるという一族の内紛を経て、14代政治は再び勢力を拡大させ江戸・大掾・結城氏などと戦いました。後北条氏の北関東進出が激しくなると、15代氏治は、当初佐竹氏とともに上杉氏を後楯に対抗しますが、後に後北条氏と結びます（永禄5年=1562）。後北条氏との同盟の前

後、弘治2年（1556）には後北条氏の後援を得た結城氏により、永禄7年（1564）には上杉・佐竹氏により、小田城は落城します。氏治はそのつど土浦城へ逃れ奪還を繰り返しますが、同12年（1569）に手這坂の戦いで佐竹・真壁氏に敗れた以後はそれもありませんでした。天正11年（1583）に氏治は、佐竹義重に一時降伏、同18年（1590）には再び反旗をひるがえしますが奪還は果たせず、慶長6年（1601）に頼った結城氏の国替えで越前（福井県）にうつり、彼



小田城本丸

つくば市教育委員会提供

の地で没しました。

小田氏が小田城を失った後は佐竹氏客将の梶原政景、佐竹氏一族の小場義成が居城しますが、慶長7年（1602）、佐竹氏の秋田移封により廃城となりました。

（1）本丸跡の遺構面

盛土整地など改修の様子から6面にまとめられる遺構面（当時の地面、ないしその残り）を確認しました。遺構面保護のため、第2面以下の調査はごく一部だけに留めています。

（2）中世遺構面の変遷

鎌倉・南北朝・室町時代（第4面） 広く黄色土を盛って整地がなされます。上幅4m前後の堀が、南北約145m、東西約130mの範囲を方形に巡ります。曲輪内部は整地のみの部分と小石が敷かれた部分に大きく分けられ、石敷部の範囲は曲輪内の東から南にかけて、1/3程度と推測されます。このような堀が方形に囲み南に石が敷かれる形態は、以後の小田城本丸の原形となっています。本格的な土塁はなく、出入口は未確認です。防御性が重視されていないことから、「館」と呼ぶ方がふさわしいかもしれません。

室町・戦国時代（第3・2面） 第3面には、基底幅6~10mの本格的な土塁が初めて造られ、土塁や堀により防御された「城」へと変化します。第2面以降も、土塁は内側へ、堀は外側へ拡幅されたほか、障子堀や曲輪隅の櫓台が造られるなど、さらに防御性が強化されていきます。虎口（城郭の出入口）は東・北の2カ所で、ともに木橋が架けられました。

第2面では、曲輪内部の北西に大規模な盛土整地がなされ、溝で区画されます。その内部は多くの建物が集中する区域となっています。この建物域では焼土や炭、焼けた壁土など、大きな火災の痕跡が顕著であり、小田城を舞台とした戦乱との関連が注目されます。南の石敷部は盛土により範囲が狭くなります。この時期までに、石敷部東西には有力氏族の城館でのみ確認されている園池が構築されます。本丸での建物域や園池の配置には絵画に描かれた足利将軍邸との共通性も認められ、名門小田氏の居城としての華やかさが強く感じられます。

戦国時代末（第1面） 小田城最後の時代の遺構面で、下層面に比べて多くのことがわかっています。第2面との大きな違いは東池を埋め、西池も縮小した一方で、南西虎口を新設し、その外側を防御する「馬出」を設置したことにあります。より戦闘に対応した変化と言えるでしょう。

堀・土塁 堀は幅約20~30m、深さ約4~5mの障子堀です。障子堀は、堀底に障壁（畝）を配したもので、敵を防ぐ工夫と考えられています。また、堀と土塁・櫓台の間には、幅1.0m前後の狭い平坦面（犬走り）が巡ることも確認できました。

土塁は基底幅が10~15mです。高さは不明ですが、南東櫓台の脇では約3mで残っています。四隅は櫓台式に堀側へ張り出しますが、北西と南西は幅が狭く櫓台ではなかったようです。

虎口・橋 南西虎口が新設され、虎口が3ヶ所となります。調査では、南西虎口で3.2m四方の規模になる門とその内側につながる石垣が、北虎口で小石を敷いた舗装が、東虎口で1辺50cmほどの大きな礎石が、それぞれ見つかっています。新設された南西虎口には木橋が架けられました。北虎口の橋は木橋から土橋へと変わり、東虎口の橋は土橋状の張り出しと木橋を組み合わせたものとなります。北土橋や東木橋の張り出しでは裾に石積みがなされており、南西虎口の石垣とあわせて石の多用がこの時代の特徴といえそうです。

曲輪内部 土塁の内側には南北約115m、東西約100mの平坦面が広がります。北西部の建物域は大溝で南北約75m、東西約70mに区画され、大溝内側の東辺には塀もしくは柵が、南辺には土塁がありました。建物域は周囲より約30cm高くなっています。建物域の内部は、南側では溝による区画が大きく柱穴や礎石が集中するが、北側では区画が小さく焼けた壁土や炭化米が散布するなど、状況が異なります。このことから、南が主殿などの大型建物が位置した表(非日常)の空間で、北が倉庫や台所などの裏(日常)の空間であると考えられます。南の石敷部では、東池は無くなり、西池は狭くなって残ります。また、通路は東虎口から西へ行くものが確認されたほか、北虎口から大溝に沿って南へ行くものの存在も推測されます。(つくば市教育委員会)



慶長初年頃の真壁城と城下町の主軸方位
(半留野2008aより一部改変)

方位軸① 東へ22度前後傾く南北軸及び直交する東西軸
② ほぼ正方位
③ 東へ20度前後傾く南北軸及び直交する東西軸

桜井市教育委員会提供

真壁氏と真壁城

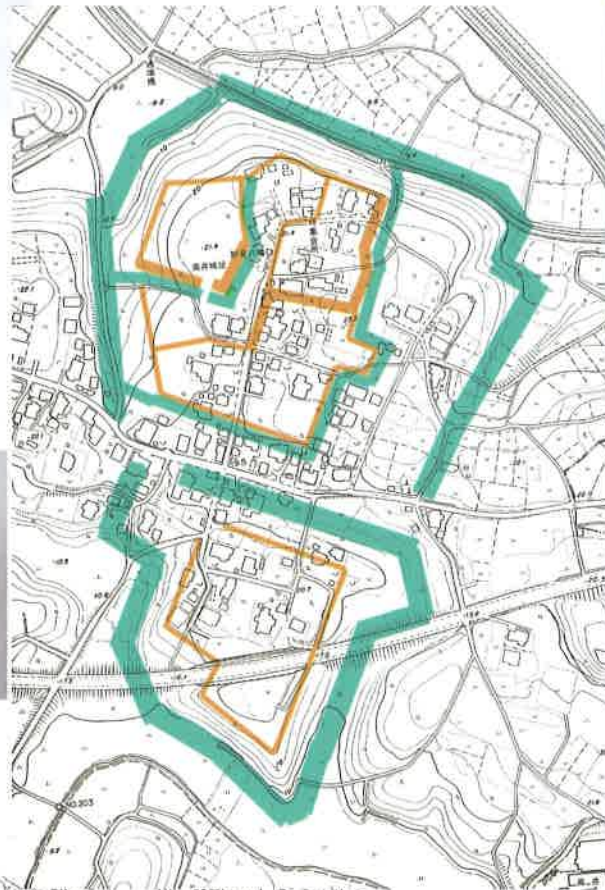
【常陸平氏一族の真壁氏】
平安末期頃、筑波山麓に拠点を置く常陸平氏一族として真壁郡の郡司職を得た平長幹は郡名「真壁」を名字とし、後に鎌倉幕府御家人として活動した。
真壁氏の残した『真壁文書』にみる真壁氏は、寛喜元年(1229)の「藤原頼経袖判下文」以来、中世の真壁郡(概ね旧真壁町、旧大和村(8ページに続く))



三仏堂出土小壺



高井城出土硯



高井城出土かわらけ



高井城出土陶器茶碗



高井城出土陶磁小皿

右の図は、いまだ全体の発掘が実施されていない高井城の推定縄張り図です。水色が堀、土色が土塁となります。



左の図は佐竹氏の本拠地であった常陸太田市太田城の推定縄張り図です。斜面、青色は土塁・堀、道は黄色で示しています。馬場町や車内といった地名からも台地全体が城の範囲であったことがわかります。

佐竹氏は常陸国の守護にして、最大の戦国大名でした。関ヶ原以後、出羽国秋田に転封になったため、地元に残りの遺品は、ほとんど何も残っていません。下の甲冑は秋田市立佐竹資料館に保存されているもので、兜についている飾りは毛虫を意味しているのだそうです。



佐竹義宣甲冑



佐竹義重甲冑

常陸太田市教育委員会提供



上段左：小田城出土 五彩磁器小壺

上段右：小田城本丸 南東より望む

中段右：小田城全体図

中段左：真壁城中城庭園 南方より望む

下段右：樂法事真壁城から樂法寺に移築された黒門

下段左：真壁城全体図



つくば市教育委員会提供



桜川市教育委員会提供



桜川市教育委員会提供

(5ページから続く)

の範囲)の地頭職を得ており、中世後期には国人領主として、筑波山北麓での勢力を維持した。

いまのところ平安末期～室町前期の本拠地は不明だが、戦国期に最終的な拠点としたのが真壁城跡と推定される。

応永三〇年(1423)、室町幕府と鎌倉府の対立のなかで幕府側(京都扶持衆)に与した真壁氏は、鎌倉府に攻められた惣領家が没落、後に庶子家・真壁朝幹が所領回復するという、真壁氏の存亡にかかわる大きな画期を経験した。

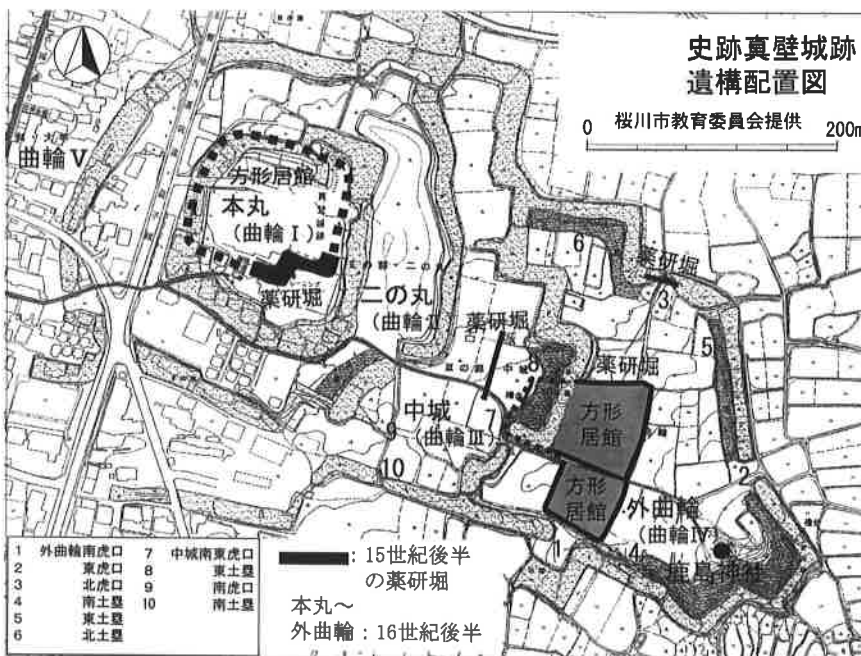
真壁氏の「当家大系図 全」等によれば、朝幹以降、家臣団として北・南・東・西といった一門が成立し、城の整備、城下町形成、寺社への支援などが盛んになったようである。

戦国時代・永禄年間の当主・真壁久幹の時代は、常陸北部の佐竹義昭から子息九郎に「義」字が与えられ、永禄十二年(1569)の小田氏との北之郡における合戦(手這坂合戦)では佐竹義重と共同作戦をとるなど、常陸最大の戦国大名である佐竹氏に接近することで勢力維持をはかっている。永禄七年(1564)と天正末年前後には、佐竹氏から真壁城の普請が指示されており(畑田旧記・真壁文書)、城郭の普請にも佐竹氏の影響がみえる。

真壁城の廃城は城内に17世紀代以後の遺構面が確認できないことから、佐竹氏に従い出羽移封となる慶長七年(1602)後まもなくと考えられる。

慶長十一年には浅野長政が真壁・筑波両郡で五万石を隠居領とした。発掘所見では浅野氏の時代に行われた土塁等の破壊を確認し、江戸初期の段階で機能を止めた様子がみえる。

【戦国の真壁城と城下町】戦国末期、真壁城の西側には城下町がつけられた。



天正～慶長年間の『高野山清浄心院過去帳中』『常陸日月碑過去帳』に記された真壁城にかかわる地名には「真壁館之中」天正六年(1578)、「真壁実城」天正八年、「真壁陣屋」天正十五年、「真壁東館」天正十九年がある。城下町を示す地名には「内宿」天正十九年(1591)、「大宿」文禄三年(1594)、「中町」慶長四年(1599)、「本宿」慶長七年(1602)があった。これら「城」と「城下」に関する地名は、現在の地字名と一致するものもある。そして真壁城の

発掘成果や遺構の配置をもとに、真壁城と城下の設計を比較すると、両者に共通する特徴に気がつく。

その特徴とは、真壁城の遺構と城下町の町割(街路の配置)の設置方位軸の近似である。設置方位軸は堀、溝、土塁、建物、道路の設置に際して設定された基準方位軸である。真壁城の東西・南北方向の方位軸は、年代とともに方角を変えている。変化の理由は明らかではないが、城主の交代等、なんらかの要因によって、新しく測量基準点やランドマークを設定し、城と都市を設計したと推測される。

実際、真壁城跡の発掘では同時期の遺構は同様の方位軸で配置され、城下街路の設置方位軸との近似もみられた。このことから、城と城下町をほぼ同期に設計したと仮定でき、真壁城と城下町の方位軸をたどることで、堀、土塁、道路の設置順序や遺物の少ない遺構の年代推定も可能となった。

城と城下を具体的にみてみよう。発掘で確認された方位軸は3つあり、南北軸が東へ約 22 度傾く軸（永禄年間）、ほぼ正方位の軸（天正年間）、南北軸が東へ約 26 度傾く軸（天正～慶長七年）がある。方位軸の年代は真壁城跡の出土資料の年代を参考としており、中世の真壁城と城下遺構の主要部分は、これらの方位軸の組み合わせで成り立っている。

出土した遺構年代、古文書などをもとに、真壁城跡と城下の成立過程をみると、城の中心部から北側と城下中心部の基の主幹街路（見目、内宿付近）は永禄年間の方位軸、中心部から東側および城下南東部は天正年間、城の中心部から南側の一部と城下の西北部街路（新宿、中町）は天正から慶長七年の間につくられたと推定できる。真壁城跡は、城と城下町が一体的に造られた様子を示す貴重な事例である。

【発掘からみた真壁城跡】 平成9年度以降、真壁城跡は復元に向けた発掘調査が開始された。

遺構と遺物の年代は一五世紀中葉から一六世紀末である。出土品は中国産磁器（龍泉窯、景德鎮窯等）、国産陶器（瀬戸美濃・常滑等）、在地土器を主に、これまで出土した総破片数は15万点を超える。出土品の8割前後を占めるかわらけ（土器盃）は形の変遷がわかり易く、遺跡の年代を細かく見極める資料でもある。それによれば大きく下層（Ⅰ～Ⅳ期）と上層（Ⅴ・Ⅵ期）の遺構変遷が確認されている。

Ⅰ～Ⅱ期（15世紀中～後葉）は溝で区画された屋敷、Ⅲ期（15世紀末～16世紀第1四半期）は薬研堀の区画による方形居館群が成立する。Ⅰ、Ⅱ期は不明な点が多いが、Ⅲ期の方形居館群は本丸下層の方形居館の薬研堀が幅10m、深さ6メートルほどで屈曲構造を持つなど規模・構造が突出する。一方、外曲輪や中城下層の方形居館群は堀の屈曲構造がなく、堀幅4m、深さ2m前後と軍事性にやや乏しいものであった。これらの方形居館群はⅣ期（16世紀第2四半期）には廃絶し、堀が埋まって墓域となり、城館の継続は見られない。いわば方形居館群の真壁城は、期間を限定し、本丸下層の居館を中心として臨時的に結集した姿であり、それは享徳の乱（1455～1483）以降続いた関東の戦乱に対応するため、真壁氏が一族・家臣とともに危機管理体制をとった姿と考えられる。

Ⅴ期（16世紀第3四半期）の真壁城はⅣ期の墓域と方形居館群の痕跡を大量の整地土で埋めつくし、本丸中心の求心的構造城館へと大きく造り変える。真壁城は本丸の周囲を広大な曲輪群で囲いこみ、多くの折れ（横矢）を持つ堀と土塁で防御構造を高めた。そして次のⅥ期（16世紀第4四半期）にかけて改修を重ね、城下町も拡張してゆく。Ⅴ期とⅥ期は戦国時代・真壁氏の全盛期ともいえる真壁久幹、息子氏幹の時代であり、彼らの基本構想によって、城と城下町が造りこまれてゆく姿がうかがえる。

【真壁城の庭園】 真壁城跡の特徴に中世の庭園遺構がある。

庭園跡は本丸で1箇所、中城（近世城郭という三の丸に相当）で2箇所出土した。いずれも飛石や池をともしなう庭園で、城の周囲に常陸三山の絶景を望む真壁城にふさわしい。

庭園のほぼ全体が発掘された中城庭園は、永禄年間に東西25m、南北14m程の池と、筑波山を望む小規模な建物を組み合わせた庭園をつくり、天正年間は大規模な建物を付け加え、庭園を大きく拡張していた。出土品は天目茶碗、茶入、茶壺、風炉などの茶道具や高級品の中国産青磁、白磁等があり、この場所が特別な接待場所とわかる。

建物跡は柱穴、礎石等が出土している。小規模で土壁を使う茶室らしき掘立柱建物1棟、主殿や会所と思われる大規模な礎石建物1棟や掘立柱建物2棟が、庭園の池を囲んでいた。池の西端には、3間四方の掘立柱建物と通路状の掘立柱列からなる舞台状遺構（能舞台か）があり、池と様々な用途の施設群からなる迎賓館的な庭園遺構と推定されている。（桜川市教育委員会）

手這坂合戦

常陸を南下する佐竹氏、その同盟者の真壁氏に対し、小田原北条氏の傘下となった小田城の小田氏との間で決戦となった。永禄12年（1569）、常陸北ノ郡（現石岡市小幡）付近の山岳地帯で起きた合戦。

「手這合戦日記」にみる、出陣人数の推定では小田氏治軍3000人に対し、真壁久幹・氏幹・義幹・家臣

らが70騎(200~700人)、真壁別働隊(筑波山西廻り、在郷、町、寺の各一騎)1123人。真壁軍出陣合計は1300~1800人ほどとおもわれる。これに梶原政景(久幹の娘婿、太田資正の次男)、佐竹氏の客将であった太田資正(梶原政景の父、もと岩槻城主、太田道灌のひ孫)3、40騎、それぞれ300~400人であった。

戦国時代の出陣兵力の計算のひとつを例にとると「天正十九年・佐竹義宣書状」では100石で3人役であるから・小田軍=10万石×300=3000人、対して・真壁軍=5万石×300=1500人とみられる。

合戦のあった旧暦11月24日は、現代の12月末~1月初め頃、筑波山周辺は朝霧がかかり、合戦の始まりは五つ(午前8時頃)であった。



小幡手這坂合戦全体図
桜川市教育委員会提供

→ 大部隊の小田軍は関係がとれにくい。しかも午前2時からの柿岡出陣で疲労。
→ 小部隊の真壁軍は戦略「常蛇の陣法」をかくしつつ、本隊と別働隊を出陣させる。

真壁久幹は城主とその息子を含む小人数で小田氏の油断を誘いつつ、「二ツ館」まで登って「ときのこえ」を上げた。一方、別働隊1000人を山田、酒寄、大島を経て小田軍背後と小田城攻撃に向かわせ、情報を流すことで山岳地帯にいる小田軍を動揺させ、混乱させた。小田氏治はこの誘いにのり、一度南に下った山を登って戻り、最後に険しい山岳地形の手這坂を下り、真壁久幹のいる「二ツ館」付近を目指した。

真壁軍は弓の衆400人に左右から横矢

をかけるよう待ち伏せしていた。鉄砲の上手(狙撃手)・根来大蔵を含む久幹本隊と3方向からの攻撃で小田軍を混乱させる。弓衆、鉄砲は、手這坂下方での待ち伏せが誘導しやすく、狙いやすい。

根来大蔵は膝台(低い構え)で撃ち、60m程の距離に迫った馬上の岡見弾正(谷田部城主)の胸板を撃ち抜いた。

小田軍は総崩れとなり、討たれて谷に落ち、残りは土浦方面へ退却したのである。

地名・地形からの合戦場所の復元 手葉井(「手這坂」か。読みが「てばい」、膳棚・長峰・番盃田(湯袋峠と手葉井に近い城砦。いずれかが「二ツ館」か。)

現在まで残る小田軍の地名「膳棚・陣地、五通臺・通過した五叉路、兜山・陣地」、佐竹軍の地名「梶山・勝った場所、勘定掛・軍忠状を掛けた場所、白鳥神社・戦勝祈願した場所」

手這坂合戦の結論 小田氏治3000人对真壁久幹600人の劣勢をはねかえした真壁久幹の戦略と戦術は、情報戦を制しながらの2方面作戦であった。作戦情報を隠すため霧にまぎれ、久幹と長男、次男と少数部隊であるという情報をみせ、攻めたくなるよう手這坂に誘いこむ。別働隊の存在を、交戦中の小田軍に知らせることで、動揺、混乱させた。太田、梶原軍による後詰支援の「関係プレー」で作戦を安全に成功させる。

戦術として鉄砲と横矢による3方向からの攻撃があった。正面には鉄砲の上手、根来大蔵の狙撃と精鋭部隊200人による攻撃、両脇からは横矢部隊400人の伏兵。精鋭部隊の少なさを誘い、鉄砲で部隊長を打って指揮系統を遮断したうえで、横矢の一斉攻撃で大混乱におとし入れる。少数で大部隊を倒す模範的戦術だった。(桜川市教育委員会)



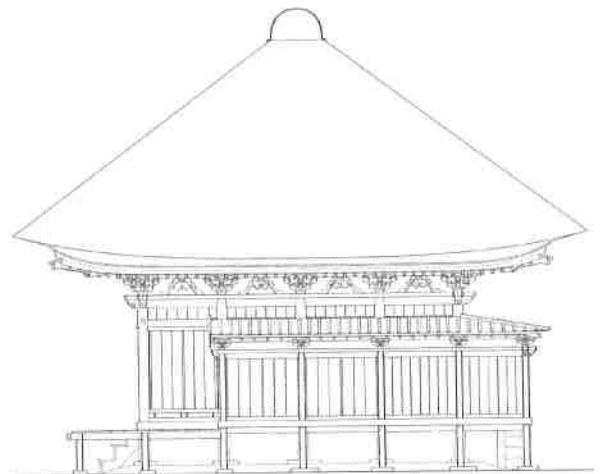
正側面外観



正面図



須弥壇・来迎柱・来迎壁



側面図



内陣内側



解体修理の様子

三仏堂は昭和51年に国の重要文化財の指定をうけ、昭和60年に解体修理が行われ、建築当初の姿になりました。釈迦・弥陀・弥勒の三仏を祀ります。およそ16世紀前半の建築と考えられています。桁行三間、梁間四間で、もこしを付け、禅宗様に和様を加えた様式で、円柱に足固貫、飛貫、頭貫、台輪を組みます。組物は出組で正面と背面は詰組とするが、そのほかに板蓋股をおきます。軒は二軒半繁垂木です。内部は前寄り一間を外陣、後ろを内陣とし、内陣後方には来迎柱を立てます。床は拭板敷、天井は猿頼天井を張ります。正面三間は唐戸構、両側面前寄り三間が引達戸、内外陣境は中敷居入りの引達戸となっています。来迎柱間に、須弥壇と来迎壁があります。もこしは前寄り第二間から後にあり背面に廻るが、背面中央三間は出が小さくなります。方柱に足固貫、頭貫、台輪を組み、平三斗、一軒疎垂木、木舞裏とします。柱間は正面が板壁、側面前寄り二間が片引戸、後寄り二間が板壁、背面中央が引分け戸のほか板壁です。三仏堂は関東地方における中世から近世にかけての建築の流れを知る上に貴重な遺構です。



薬師堂現況



屋根裏

薬師堂は三間堂の形式となる。

平面プランは三間四面の一室になり、来迎柱とそれに関する設備がなく、上部大梁等にもそれらしき痕跡が認められない。柱に残る痕跡及び仕口をみると、正面からの出入口はなくなり、左側手前一間が片引となり、正面を除いて他は横に胴縁が入り、縦板壁目板打ちとなることが、残存古材で知られる。正面は坂戸か葺戸を内側に掲げて吊られ、下半分の戸は可動可能の戸が上から落込みみとなる。須弥壇部分の柱間は、現状壁がなく外側へ突出された感じになっているが、痕跡をみると、内法竇が通り、内外に長押が廻り板壁となる。

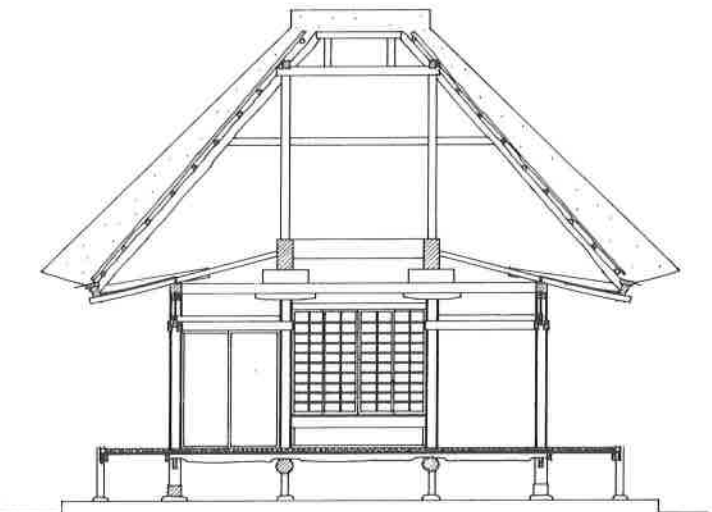
外観の現状は、縁東が軒下まで伸び、柱の役目をして外壁があるが、これらは堂を広くつかうための後世の改造である。化粧垂木・茅負・桁及び柱の外側等は一律に風化の痕が認められ、当初は外に面していたと考えられる。

床廻りは、大曳が当初で、根太に取替えの様子が窺える。床板は当初の板が数枚残っている。床板表面に見える摩滅の様子から、当初は拭板敷であったことが判る。

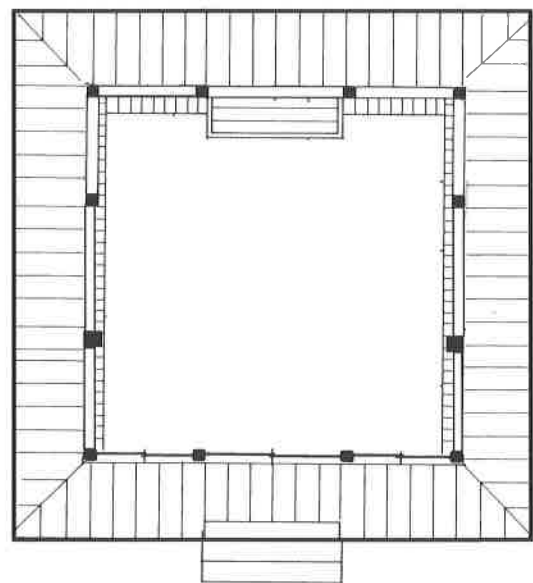
以上の事を総合すると、正面に葺戸等の突揚げ戸が入り、側面から出入りする。内部は簡単な須弥壇の如きを設置して本尊を安置する。天井は、おそらくごく簡単な材料で小屋裏が見えない様な措置をとったのであろう。この堂は持仏堂的な性格をもった建物ではなかったかと推察できる。



正面図（加筆復元）



横断面図（加筆復元）



平面図（加筆復元）

下高井東光寺薬師堂 薬師如来立像 1 躯

(品質・法量) 桧材寄木造 像高 89.3 cm

(形状) 納衣を通肩に着ける。右手に施無畏印、左手に薬壺。

(構造) 頭部は耳のところで前後 2 材矧ぎ。前面材は胸部肉身部まで彫出する。彫眼。

体部は躯幹部を前後 2 枚矧ぎ寄せて、足柄も彫出する。これに体側部前後 2 材を左右各々に矧ぎ寄せて、左右裾部を鋸で留める。両足先を寄せ、両手を挿込みとする。

面部及び胸部肉身部は布貼り錆下地とする。元来は全体に彩色が施されていたと思われるが、今は素地が露出している。

(所見) 総体的に損傷が見られるが、後補の部分は両足先以外にはなく、遺存は良い。

胎内腹部に次の墨書があり、本像の制作年次が判明すると共に、往時を知る歴史的資料として貴重である。

*「寺田」は現在の取手市寺田のことであり、「乙子」は守谷市高野の乙子のことであろう。

高源寺 地蔵けやき (茨城県指定天然記念物、昭和 14 年 3 月指定)

樹高 19m、幹周り 10m30 cm、推定樹齢 1600 年

高源寺の正門と本堂の間に立ちはだかるようにそびえたっています。根本から 7m の高さまで幹の中心が失われて空洞になっていて、その名称の由来となった地蔵尊が安置されています。幹に大きな穴が開いており、そこを産道にみたてて、妊婦が通過すれば安産まちがいなしのご利益があるといわれ、信仰を集めてきました。

その樹齢からすれば、戦国時代にはすでに、千年を超える老木であったわけです。高井に隠棲した胤永にとっても、なじみ深い光景であったに違いありません。

高源寺 相馬胤永の墓、駒形、南西方向

(本体) 高さ 123×幅 47×奥行 25 cm

(台座) 高さ 24×幅 59×奥行 53 cm

(基礎) 高さ 11×幅 71×奥行 58 cm

墓には俗名は書かれていない。墓石の両側に残された姓は、この墓を建てた縁故の人々でしょうか。もと家臣だったとも想像できます。現在でも、高井地区の周辺では多く見られる姓です。

本尊依露霧破壊中興 幸阿弥禅門
 願主慶秀嫡弟良清 再造仏師誓阿
 諸檀那胤秋昌舜^{俊力}賀聖満藤士三郎^{乙子}
 于皆文明十一年^{寺田}亥十月吉日

(薬師像体内銘)

(左面) 廣瀬中久木 大屋今泉 麻生秋谷
 関宇田野 鈴木高橋 中山 飯嶋

(正面) 実相院殿竺巖道仙居士
 正月十三日

(右面) 飯沼森田 宮本麻生 秋谷塚田 飯泉渡邊 中山染屋 山崎
 海老原野口 横瀬片倉 篠原 小林

寛永十七庚辰年

(胤永墓碑銘)

主な参考文献

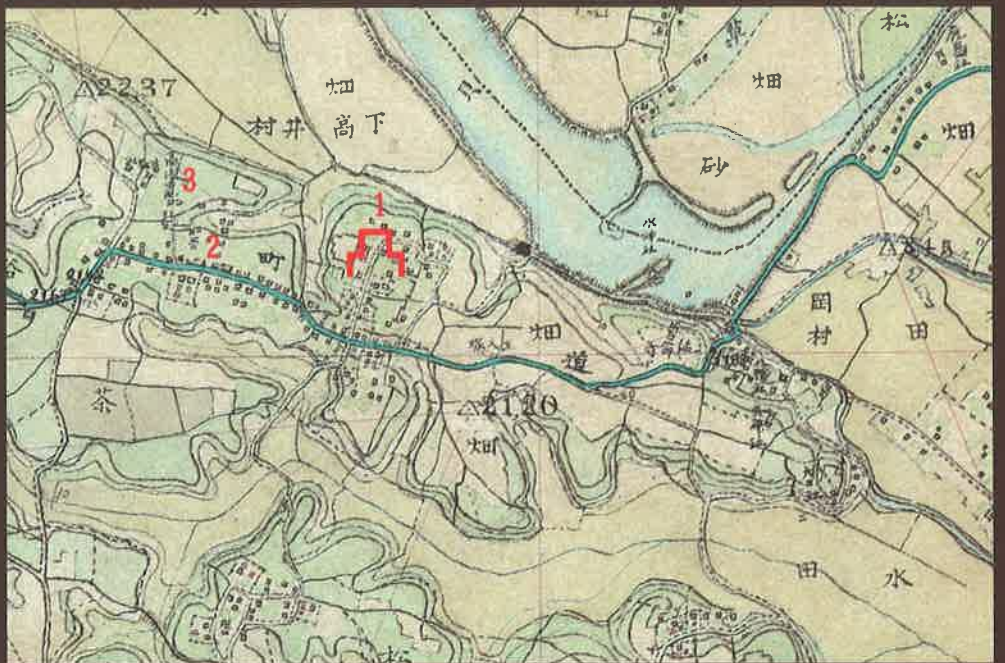
『取手市史』古代中世史料編、通史編 I、社寺編、石造遺物編、植物編

『重要文化財 竜禅寺三仏堂修理工事報告書』、『竜禅寺と三仏堂』、『茨城県取手市下高井城跡一発掘調査報告書一』、

『取手市下高井城跡 第3次発掘調査報告』、

つくば市教育委員会『国指定史跡 小田城跡』、常陸太田市教育委員会『常陸太田市内遺跡調査報告書』第2集、守谷町教育委員会『守谷城址発掘調査報告書』

川嶋建『常総戦国誌 守谷城主相馬治胤』、蔵重一彦『北相馬郡五城址解説』、峰岸純夫・齋藤慎一『関東の名城を歩く 北関東編』



- 1 高井城 (写真右上)
 - 2 東光寺葉師堂 葉師如来 (写真左上)
 - 3 高源寺 地藏げやき (写真左下)
同 相馬胤永の墓 (写真右下)
- 地図の青いラインが、藤代から守谷に至るかつての主要な道路でした。

* 地図：二万分一迅速測図 明治14年(部分)

